

Close-up
Interview

(今月の表紙の顔)

「今は自分でもビックリするくらい、頭の中でイメージしたとおりのボウリングができています」

“ハガネの3冠女王”

“ハガネ(鋼)”とは、焼き鍛えて強度を増した鉄のこと。全日本女子プロ選手権優勝5回、年間ポイント、賞金、アベレージランキングの3冠達成3回の実績を誇り、昨シーズンには晴れて永久シードプロの仲間入りを果たした姫路麗を「エリート中のエリート」と認識しているファンも少なくないが、実はデビューから初勝利までに7年余りを要した“遅咲きの花”。幾度も味わった挫折と悔しさをバネに、己の心技体を鍛え込んでいった「努力の人」なのだ。

タカラジェンヌの
夢破れて

姫路は、いわゆる母子家庭で育った。航空自衛隊の隊員だった父は、姫路が生後間もないころに飛行訓練中の不慮の事故で急逝。当時、専業主婦で手に職を持たず、生きていくために大変な苦労を味わった母は、愛娘には同じ轍を踏ませまいと、幼少のころから数多くの習い事を課したという。

そのなかで姫路がもっとも長く、本腰を入れて取り組んだのはクラシックバレエで、その先に掲げていたのが「タカラジェンヌになる」という夢(目標)だった。

「タカラヅカは、かつて母親自身が憧れた世界でした。母が敷いたレールの上を黙々と走り続けていた少女時代の私は、タカラジェンヌになることが母の苦勞と期待に報いる最善の道だと思っていたんです」

だが、受験資格ギリギリの18歳で挑んだ入団試験は2次で無念の不合格。後日、自分よりもバレエ歴の浅い受験生が合格したことを知り、芸術点なるものの曖昧さに疑問を抱いた姫路は一転、以前から多少の心得があり、「点取りゲームで勝ち負けの結果が明確な」

ボウリングのプロを目指すことを決意する。それは同時に、母親からの精神的自立を期した「はじめの一步」でもあった。

一度目標を定めたら、ワキ目もふらずにとことん取り組んでしまう性分。北野周一(26期)の下で練習に明け暮れ、上達は思いのほか早かったが、それでもプロテスト突破には3度の挑戦が必要だった。決して天才でも、人並外れて器用なタイプでもないのだ。

2度の“確変”を経て

前文に記したとおり、プロデビュー後も初勝利までの道のりは遠かった。

「2回ほどあった優勝のチャンスは、大先輩の時本美津子プロ(7期)と、斉藤志乃ぶプロ(3期)に阻まれました(苦笑)」

初の年間ランキング3冠も達成。勇躍トッププロの仲間入りを果たした。

以後も年間1勝ペースでコツコツとタイトルを積み上げていき、15年には年間4勝&ランキング3冠と2度目の“確変”。思えば未勝利の時代は結婚し、長女を授かって子育てに追われていたであろう時期とも重なるが、「当時から娘の面倒はほとんど義母が見てくれていたので、それは理由にならない」と本人は一笑に付す。

それでも「いつ何時、何が起こるか分からないのが人生。いつ最期の別れがきて後も悔しいように」と寸暇を惜しんで幼い愛娘と過ごす時間を作り、母親としての愛情を注いでいた。「その娘ももう18歳。親離れしてちょうどいい距離感ができた今は、その分仕事に集中できている気がします」

また、13年からは信頼できるパーソナルマネジャーを雇用。試合会場への送迎やスケジュール管理などを任せられるようになったことも、小事を嫌い、何に対しても全力で向き合ってしまう姫路にとっては、自身にかかる負荷を一気に軽減する大きな一助となったようだ。

神がかった
全日本V

昨シーズン最終戦、自身2年ぶり5度目の優勝に輝いた全日本女子プロ選手権における姫路の戦いぶりは、まさに圧巻だった。予選ラウンドを独り旅で快走していた坂本かや(49期)を、準決勝で測ったように逆転。トップシードでTV決勝進出を果たすと、優勝決定戦では最年少19歳での全日本Vを目指して勝ち上がってきた坂本を、2フレからオールウェーの準パーフェクト290で返り討ちに。坂本も「姫路さんがすごすぎて、悔しい気持ちもわからない」と苦



笑するしかなかった。

「若くて勢いのあるかやちゃんに、決勝のマッチゲームで2ゲーム続けて勝つのは難しいと思っていたので、逆転でトップシードをとれたことが大きかった」と姫路。優勝決定戦も、ゲーム開始のホイッスルが鳴るまでは「いつものことだけど、緊張で足が震えていた」と言いながらの快投。一投ごとに集中力を増し、眼光鋭くなっていくアプローチ上の姿は、まるで神がかったオーラに包まれているかのようにさえ見えた。

「20勝に到達して、去年いちばんの目標だった永久シード権を獲得してからは、いい意味で肩の力が抜けたというか、今は自分でもビックリするくらい、頭の中でイメージしたとおりのボウリングができています」

もはや向かうところ敵なしの感もある“絶対女王”だが、次なる目標はどのあたりに定めているのだろうか？

「JPBAの理事・副会長として、ボウリング界発展のためにできることは何でもやりたいと思っています。試合でも、若い人たちの台頭を願う気持ちはあるけれど、いざ勝負となると、つい(苦笑)。志乃ぶプロは最近、大会中でも後輩にアドバイスを送ったりしていますが、私にはまだ無理ですね」

無論、その必要はないだろう。斉藤志乃ぶは全日本優勝10回、通算74勝のリビングレジェンド。その数字に少しでも近づくべく、これからも貪欲に勝利を目指してほしい。実際、斉藤は

1992年、44歳のときにも年間6勝を挙げ、若い選手たちの分厚いカベとして立ちはだかっていたのだから。

「とりあえずは次の1勝ですね。今年からプロリスト(リスタイ)禁止の新ルールになって、その初戦がディフェンディングチャンピオンとして臨むオールスターゲームス。恥ずかしい結果で終わらないように、全日本の翌日からプロリストを外して練習しています」

体幹が強く、バランスのいい彼女のボウリングは、リスタイのあるなしで変わることはないはず、というのが某男子プロの見立て。表情を見る限り、本人の感触も悪くないようだ。

「この一年がどういう結果になるのか、自分でも楽しみです」

そう言うだけの余裕と自信が、今の姫路にはある。

(文中敬称略)



▲永久シード権獲得のV20を決めた瞬間、姫路は万感の表情でガッツポーズ! (2019年10月26日、ラウンドワンスタジアム堺中央環状店)

だが、2007年9月に彦根プリンスカップで待望の初Vを遂げると、翌08年には全日本初制覇を含む3勝を挙げ、同時に



ひめじうらら/本名同じ。1978年3月21日生まれ、大阪府出身。血液型B型。161cm、右投げ。2000年デビューのJPBA33期生(ライセンスNo.352)。公式戦優勝22回。公認パーフェクト13回。P★League優勝12回。フタバボウル所属。JPBA副会長。